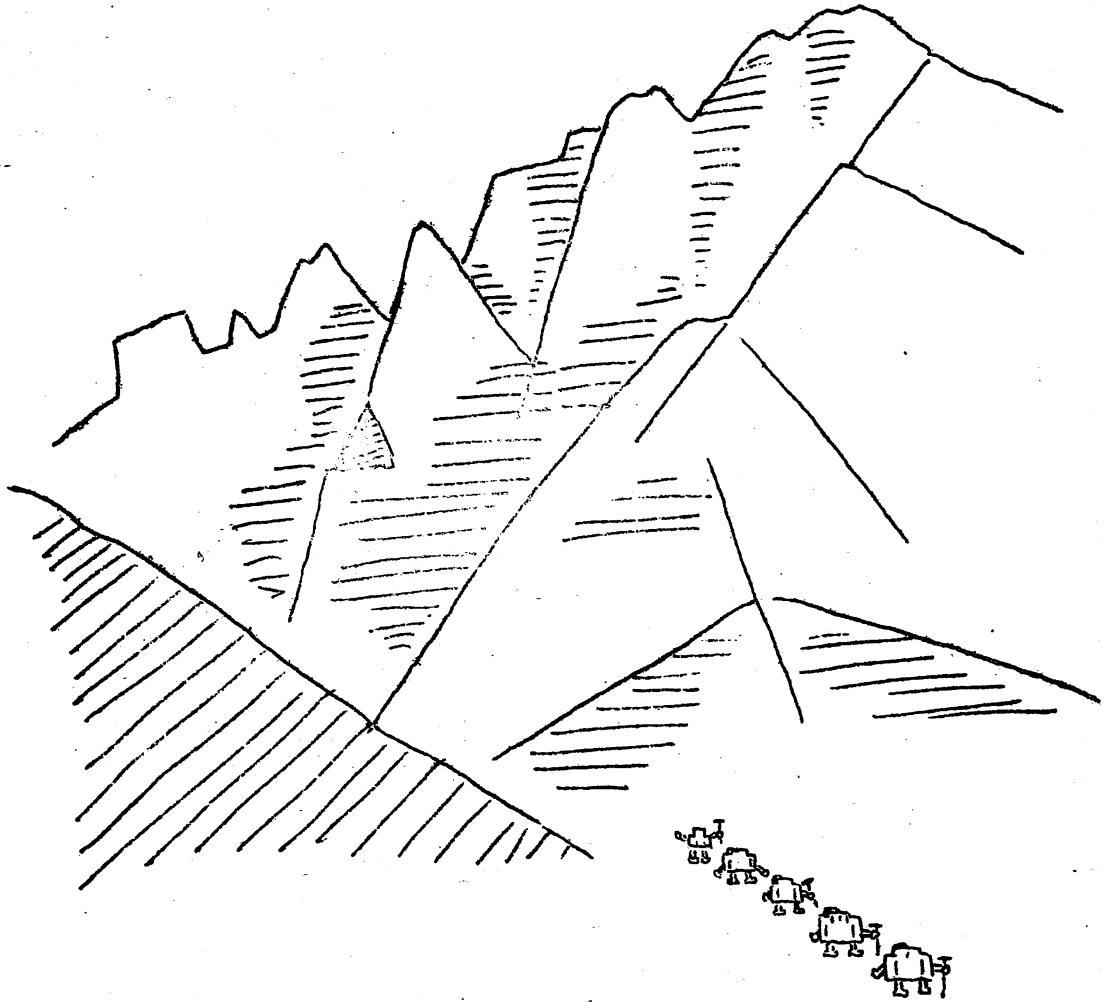


1976

# 剣岳西面報告書

〔池ノ谷 & 東大谷〕



信州大学山岳会

伊那松本山岳部

—SIMAC—

## ・山行をおえて……

強烈な印象に残る山行だった。心身ともに疲れ果てた。東大谷脱  
出行では本当に僕等の持てる力の全てを出し尽くした気がする。東  
大谷には、来年また来る。コマワサルゴでは、その時に登ってやる。

三ノ倉では、ほぼ予定通り行動を消化できたのに、東大谷は断  
念しなければならなかったことについては、各人が真剣に受け止め  
これからの山行に生かして下さい。

しかも、みんなそろってビールが飲めてよかった。東大谷出合で  
ホラーッと放心したように真夏の雪を眺めていたのが、なつかしい。そ  
して、また、平らかな日本海を見ていると何言うこともなく心が落ち  
つき山の日々がもう遠い昔のこのように思えてくる。

(L. 師田)

はっきりした考えを持たずに入山する山の中でいろいろ迷うもの  
です。(はっきりした考えというものは、なかなか持てないものだし、また、  
自分ではっきりしたつもりで入山しても、やはり迷うもの  
ですが。) 今回も、はっきりせずに入山してしまい、また、メンバー間の差もあ  
り、その影響もいくぶん行動にあらわれたと思います。

浅草の中から、真夏の日本海をながめている僕には、この一週間  
余の剣西面が、もう夢のようです。

(二俣)

しんどかったが充実した山行であったと思う。東大谷で予定の行動  
ができなかったのはしかたがないと思う。いつもながら入山前の勉強  
が不十分であった。また岩場でのルートファインディングが非常にまずいと  
感じた。4ノ倉に登れてうれしかった。

(片山)

最初の日、それも2P目でバテてしまい、自分でショウワであり、後々ま  
で尾を引き、終始、消沈した山行であった。師田さんをはじめパーテ  
ーの皆さんに多大な迷惑をかけてしまい、まことに申し訳けない。下山し  
たら、トレーニングで、精神面も、技術面の養成につとめたい。剣西面は  
自分にして、もっとも、後になって登るべき山だったのかもしれない。

(山崎)

長いといっても、1週間あまりの山行では、あるが、その中にふくまれ  
ていた内容、そして、今後への課題等、ながみの濃い山行であったと思  
う。この山行をステップとして、また一段と成長したい。

とにかく、シビアな山行で、強い印象を残した。

(ハカマダ)

# 〔剣西面 池ノ谷 & 東大谷〕

• 期間 7月18日 ~ 25日

• Member Leader 師田 信人 (M・3)  
S.L. 二俣 勇二 (L・3)  
片山 博彦 (A・2)  
山崎 克典 (S・1)  
羽鎌田 学 (A・1)

※ カッコ内は学部・部歴

• 行動概要 7月18日 滑川より馬場島、小窓峠を越え、經由池ノ谷のT.S.へ。  
(滑川までは前日に行く)

19日 ただひたすら歩いて

20日 池ノ谷左俣より三ノ窓T.S.へ  
設営ののち、ジャンダルム登攀

21日 ①池ノ谷周遊  
②東大谷 中尾根  
③4ンネ 北条・新村 ~ g44ニー、C・d  
ワラワ  
④4ンネ 中央44ニー ~ aバンド、bワラワ

22日 ①剣東面 (池ノ平山、仙人山)  
②池ノ谷、ドーム稜  
③4ンネ 左下カンテ ~ 左方カンテ  
④4ンネ 左稜線  
⑤4ンネ 中央44ニー ~ aバンド、bワラワ

23日 三ノ窓T.S.より東大谷 左の左俣下降、二俣まで。

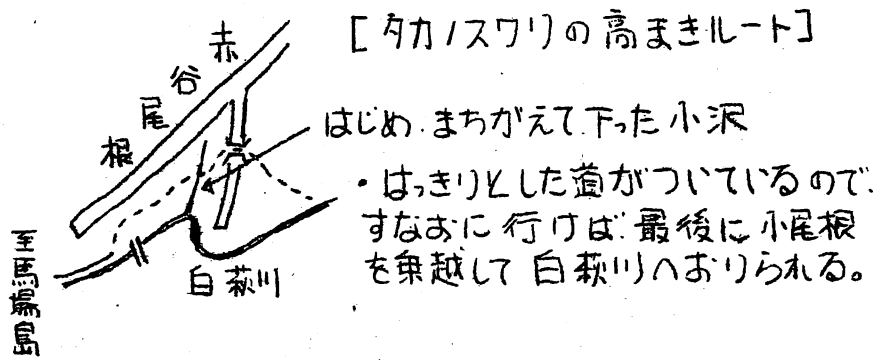
24日 二俣より東大谷出合

25日 東大谷出合より立山川經由馬場島 → 松本。

・行動詳細

7月18日 ◎のち◎

- 4:35 滑川駅よりマリシーで馬場島へ
- 5:50 馬場島着
- 6:10 " 発
- 6:57 林道の終わりで最初の一本
- 7:10 高まき道に入る。
- 8:05 高まき道を途中まで進むがこのまま行くと赤谷尾根へ入ってしまうのではないかと懸念。少しひき返して、小沢を下流して白萩川の河原へおりる。
- \* 上級生による偵察の結果、ここから登頂しに行くことは不可能とわかる。
- 8:27 小沢をもう一度のぼりなます。そのまま高まき道に入り、小尾根を乗越して白萩川に再びおりる。
- 9:40 池/谷出合をすこしすぎた地点で一本とする。
- \* 上級生2人(師田、二俣)は小尾根乗越への取付点を確認に行く。
- 10:15 小尾根乗越へ出発
- 13:40 小尾根乗越着
- 14:00 池/谷の雪渓上におりる。T.S.へ。



・小尾根乗越への取付きも、高まきをおえて、白萩川へおりた地点より、左岸ぞいに進むようにすれば、わかる。

7月19日 ●のち◎

停滞。(昼ごろまで雨がふっていた。朝は雷も、しもなっていた。)

7月20日 ⑨のち七きじきガス。一時⑩ 夕方は再び①

3:00 起床

4:35 池/谷T.S. 出発

5:40 二保着

5:50 〃 登 池/谷左保に入る。

池/谷尾根のすし下あたりで山崎のペースがおちだし  
たので 師田、片山、羽鎌田は、さきに三ノ窓へ向かう。

9:20 先行 Party 三ノ窓につく。

二保、山崎は、向かえに行きた師田七七にも おくれて到着。

・B.C. 設営後 4ツネ・ジャンダルムの登攀

◀ジャンダルム凹角(右)ルート▶ L. 二保、羽鎌田  
(all Top)

11:50 取付

13:30 終了 (PIの頭)

1P目 リッジ状のところを、5mほど登り、右へトラバースして、凹角  
状のところへ入る。途中で一たんテラスに出て、ふたたび凹角に  
はいるが、一たん、右の壁に、にげてから、はいる。肩にてびしー。

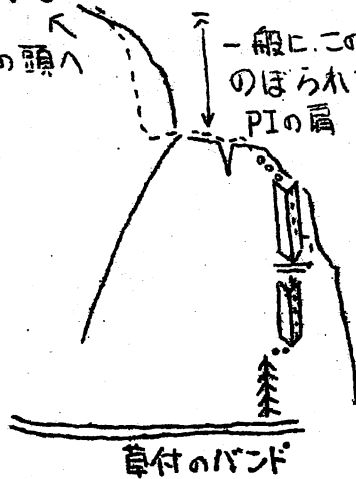
2P目 ガんたんな岩場を のぼり、ギアをこえて、みじかいがビ  
ンをきる。

3P目 ジャンダルムの正面のもろいフェースをのぼり、稜角に出てPI  
の頭へし登る。フェースのところは、下がすぼりし切れおち  
高度感があった。

※PIの頭へは、一般には、肩より、ジャンダルムの裏側をのぼ  
っている。

(記 羽鎌田)

一般に、このルートは、ジャンダルムの裏側が  
のぼられているが、今回は正面をのぼった。  
(まちがえたのです。)



◀シンブルム凹角(左)ルート▶ L.師田 片山 二崎

11:50 取付

13:40 終了 (PIの頭)

1P目 Top 片山で凹角の下から登り始める。4mほど上の所に段があり、そこを登りたよへ登っていくと、4mほど先のところにあるせまい4mこゝ(ワラカ?)があり、そこを半分ほど登って、4mこゝから出てたおりのぼりを登り1P目は終る。

2-3P目. Top 師田で凹角(右)ルート of Partyと同じところを登る。

(記. 山崎)

・両Partyとも、PIの頭に到着ののち、PIの頭より4mほどの傾斜をおこなう。途中、とつぜん雨が降り出したので、全員、ビショビショになりながら、逃るようにアアサイレンして、B.Cへもどる。

17:00 } 雨がやんだので、一俣住2人を師田が主にワリセード  
18:15 } を中心にして雪上訓練。(三ノ窓雪渓上部にて)

7月21日 ① 午後七時きかス。

◀池ノ谷周遊▶ 全員

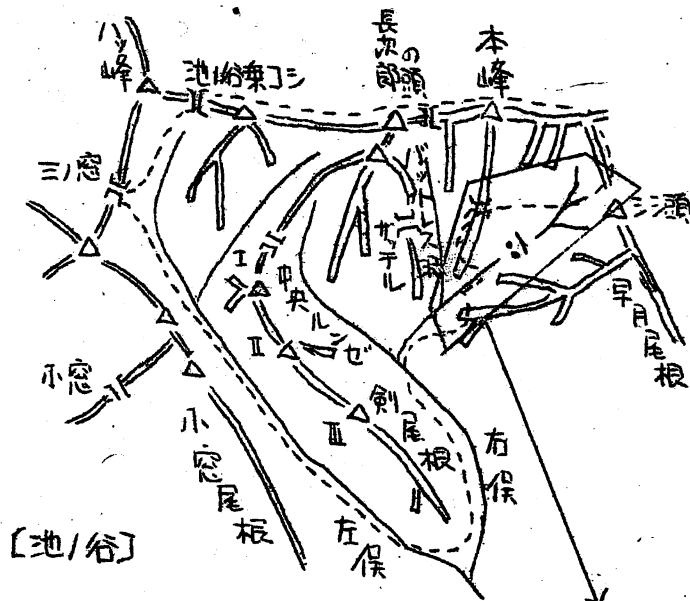
4:25 三ノ窓B.C.より池ノ谷左俣を下り始める。最初はワリセードを試みるがあまり滑らないので、あとは、中は、かけおきる。遠くには富山平野がみえ、快適だ。

5:15 二俣着。登りにくく、奥にあけなかつた。

5:30 " 登。右俣に入り、雪渓をキワステップで登り始める。正面には、右俣奥壁がそびえている。

6:20 中央ルンゼ出合。二峰南壁、ドーム壁などがよくみえる。

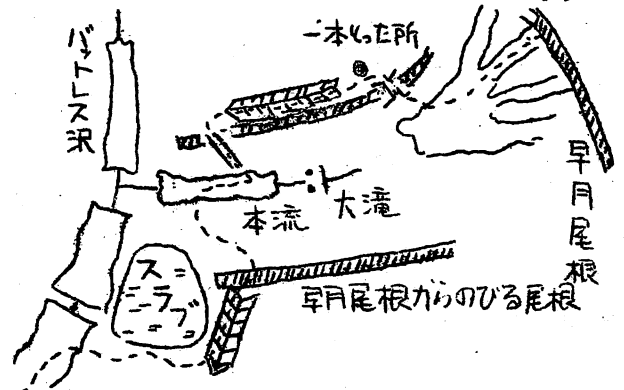
6:30 " 登。本流をつめはじめるが、途中でワレパスがあつたので、左岸の草付ルンゼより尾根を乗越し、再び本流に入る。バトレス出合付近にもワレパスが、あるので、そのまま本流を、奥に大滝をみながら、少しため、右岸の草付きのバンドより左の尾根にうつる。ここより尾根上のしめ、たルンゼを登り始める。とこざとろ、いやらしい部分があるが、はい松などがあり、そんなに困難はない。



7:42 ルンゼをぬけ尾根上の少しひらけた所で一本。

8:10 出発。一本としたところから少し登ると、突然眺望がひらけ、早月尾根につきあがる雪渓と岩稜がすばらしかった。ここからは尾根をはなれて雪渓にシートをきる。

8:40 早月尾根上着 (記ハカマダ)



◀東大谷中尾根▶ 全員

9:06 早月尾根発

9:43 平蔵のコル。

9:45 ヘルメットをつける。

ここより東大谷中保へ

下降する。かなりがらいて

て落石をかなりしてしました。中央ルンゼ出合より

最初の窟壺は、7.5mほじて飛びおりた。インセルを乗越してから2つの窟壺を巻いて降りて、その後、長さが20mほじの小さな雪渓の上をケリセードでおりろと言われ、びくびくしながら横すべりして

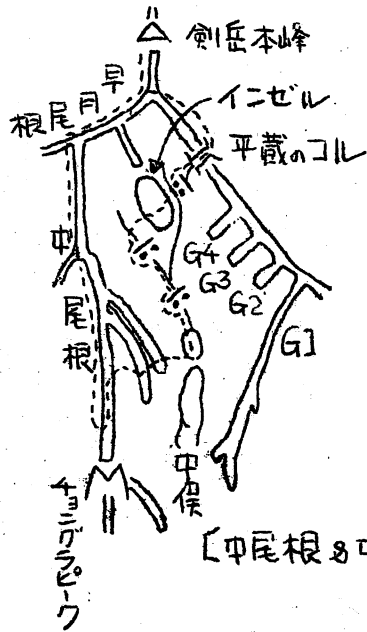
おりた。ここから右岸へ取り付き、左上の方へトラバース気味に、草付や岩場を登り、2つの支稜を越えて、せと主稜線に出る。4、5コングラビーワまで行く予定であったが、ガスってきて、4、5コングラビーワまで行く目的(駒草ルンゼの偵察)がはたせないで、途中でひき返して、中尾根上部を登り、剣本峰へ向う。

12:05 本峰着。

12:15 " 発。山崎にて休み。かなりむしあつく。ガスっていて太陽が見えなかった。

主稜線から池ノ谷ガリー-の雪渓をケリセードしておりてきて、後半がし場をおりて。B.Cにもじる。 13:20 B.C.着

(記山崎)



◀4ンネ 中央4ムニー～Aバンド  
・6ワラック▶ L 師田 羽鎌田

取付 2:20

終了 3:35

1P目 4ムニーの中の小テラスで確保する。4ムニーは登らず右のリップを登る。途中で一たん4ムニーにはいるがコネが少しやらしい。あとは簡単なリップを登り、確保点へ出る。

[中尾根 & 中保。上部] 30m。

2P目 4ムニーといってもむしろガリー状し思われるところを登り中央バンドに達する。最初の4ムニーのところかぬれていて、いやらしかった。

中央バンド & Aバンドはココテで行く。

3P目 6ワラックは、最初のほんの数mが、いやしいだけで、あとはワラックらしからぬ。ワラックを登り終了点に達する。ホールド豊富。(記 羽鎌田)

羽鎌田氏談「2P目か少しぬれていて、いやらしかった。息が切れたです。」

◀4ンネ 北条・新村～84ムニー・C・dワラック▶ L 二保、片山

取付 2:20

終了 4:30

中央4ムニーパーティーと別れ取り付に向う。

1P目 Top 二保で凹角を登り出す。凹角のリップで30m。凹角上部はワラックが走っている。

2P目 Top 片山で30mのリップだと思いきや、こんで登ったら、10m行った所で、スラブとハンクに前をさえぎられ、おかしいなと思いき、二保さんにここまで来てもらい、「日本の岩場」を取り出して、調べたら、取り付いた所がだいたい上の方だったので、もうII・A1のピッケル4本来て、いることが判明した。



3P目 Top 片山で、ハンク気味のフェースを登りきり、左のワラックを登り、中央バンドに出た。IV-A<sub>1</sub>のピッチは上の方にスタンスが全くなく、しんじかった。ワラックもえらかった。

中央バンドをコンテでg4ムニーの取り付きまでいく。

4P目 Top 二俣でg4ムニーを登る。ムニーのつまった所で、右へ移る所がいやらしい。そのままトラバース気味に登り、Cワラックを5mぐらい登る。30m。

5P目 Top 片山で、Cワラックを浮石に注意しながら、10mぐらい登り、左の方へdワラックへトラバース。大きなホールドがあり、それによつて、dワラックへ入り、簡単なdワラックを15mぐらい登り終了。  
(記片山)

片山氏談「ハンクをピッチで越えたので、手がヒラヒラになり、刀入れた。」

7月22日

◀剣栗面 Party▶ L. 片山, 山崎, 羽鎌田

4:45 B, C 登。三ノ窓雪渓は、テコボコでがたく、グリセードがしにくかった。適当に歩いたり、グリセードしたりして、おいる。

5:45 北取出合着。

5:55 " 登。北取の傾斜のほとんどない雪渓を登っていく。

6:20 北取の雪渓をはなれ尾根に取りつく。

6:50 池ノ平小屋着。平ノ池 周辺は少しじめじめしていたが、裏剣がよくみえ、感じのいい所だ。こんな所でのんびりするのもいい。

7:00 " 登。道をまちがえて小窓谷へのトラバース道に入ってしまう。途中、雪渓で道が消えていたので、そこから直登して稜線にもどる。

8:05 池ノ平山着。白藜川谷が見える。剣尾根もなかなかよく見える。

8:10 " 登。 ) なかは" かけ下る。

8:40 池ノ平小屋着。 昼めし。

9:00 " 登。

仙人山へトラバース道をすすむ。

9:20 ) 尾根(二取へのびる)の分枝点より 仙人山往復。

9:40 仙人山往復のあと、尾根道を二取に下る。くそあつくて、くそ

くそおもしろくない道だった。

10:20 二取着。

10:30 " 発。二取から、うんざりするような長い長い雪渓を登り

はじめた。ほんとうに長くてなかなか三ノ窓が近ずけなかった。

途中、今二ネの師田と二保とコルをかわした。

13:00 B.C着

(記 羽鎌田)

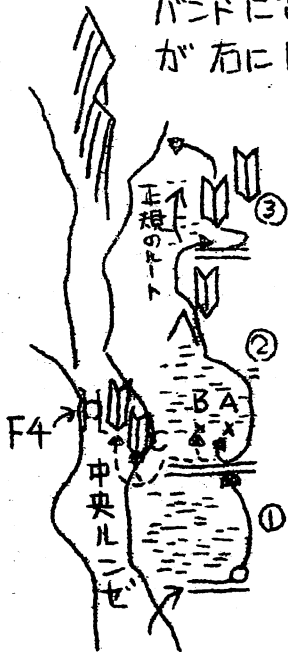
◀池ノ谷ドーム稜 から今二ネ 左下カンテ ~ 左方カンテ ▶  
師田、二保

4:25 B.C.発。連日の行動でヨレヨレになった体をひきずるように  
なで二んなエライの ヒボヤきつツR2をよじ登る。コルBよりα  
ルニセを下降する。αβは本来なら1回で済んだのに初見参の  
悲しさ、まんまたまさかして3回αβして中央ルニセF4の下に出  
る。

6:25 取付きのテラスより師田 Topで登りだす。

◦池ノ谷ドーム稜 取付 6:25  
終了 10:25

1P目 Top 師田。取付きより右手の草付よりのフェースに入り草付  
バンドにでる。ここよりまず右手から行こうと思い、A点まで行く  
が右にトラバースできずバンドに戻り、左手よりface中央を  
登ろうとするが、又してもB点で行きつまり、バンドに  
戻る。そこでより中央ルニセ側にバンドを下降、頭上に  
凹角が2つあるので右のを登り出す。しかし、C点  
でまた行きつまり敗退。結局その下のバンドにハ  
ーケンを打ち込み二保を迎える。30m III



2P目 Top 二保で左手の凹角に入る。脆く悪い。  
ハーケンにアブミを掛け、ハーケン打ち込み、また  
アブミをかけるが、ハーケンが抜けかけ、あわてて  
降りてくる。バンドをもどり、B点の下でヒレ。

3P目 Top 師田。もう一度 右手から取付き。A  
点のヒセを下から行ったらなんなくぬける。その  
ままヒレ上上のバンドまで 35m IV。

4P目 Top 二保。バンドを右にトラバース、頭上に  
2つ凹角があったので左手の凹角に入る。凹

角はアブミルートだった。アブミの掛けがえて、抜け左のブッシュに入り  
ビレー。25m IV・A<sub>1</sub>

※ 正規のルートは左手のスラブでした。

ここまでなんと2hもかかった。ザイルを巻き、ハイ松帯を登っていく。  
ブッシュを避けようとしているうちいつしか布俵屋壁の左手に出てしまい  
1Pitch どうしようもないところを師田Topで登る。そこから左にトラバ  
ーして、ドーム稜上に戻る。リッジはすっぴコンテでいく。最後のface  
でまたスタカットにもじる。

6P目 Top 二俣。赤い岩のワラック(IV) ちょっと悪い。20mも出ないう  
ちにリッジに40m くらいのはしてビレー。

そこからまたコンテ 剣尾根の頭の下でスタカット。

7P目 Top 師田。なんというところもないところのぼって頭に出る。30m III。  
セルフビレー用に打ったワラックモリハーケンが抜けなかった。もったいな  
かった。残念。残念。

長次郎の頭まで行き大休止。ルートさえ間違えなければ、楽に2時  
間半で抜けられるところだった。そこからチンネに向かう。(記師田)

師田氏談「いや、ルートファンディングが難かしく、だまくらされてはらか  
しい。やはりおがらなくなったら素直にトラの巻を出すべきたら」

二俣氏談「もうエエワ、上部のリッジを期待したのに、いかんかったなあ」

○チンネ 左下カンテ～左方カンテ

取付 11:50

終了 13:30

1P目 師田Top。ハング下でアブミザイル。アブミでハングをのこす。A<sub>1</sub> 20m。

2P目 二俣Top。face～カンテ III 35m。

3P目 師田Top。face～リッジ III 30m。

ザイルをはずし中央バンドへ。先行Partyは東京農工大。後続Party  
もある。

4P目 二俣Top。30m。20mのぼってカンテの下へ。カンテが左の凹  
角が悩むが、結局、カンテの右フランジに連打されたトケンをアブミ  
の掛けがえて10m登り、リッジへ。師田は、カンテをフリーで来る。  
「快適」だったそうです。IV+。

5P目 師田Top。ハングをビタでこす。「日本の穴場」には、「ハングの  
上の凹角は悪い」とあるが、これはウソ。30m IV A<sub>0</sub>

6P目 二保Top. 左稜線上のカンテを行き、ギアの少し上で確保。  
ギアでまたほうがよかった。40m IV+

ザイルをはずして4ツネの頭へ。 (記二保)

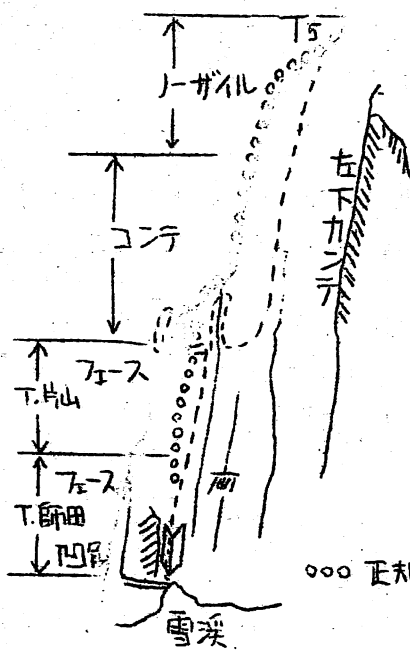
二保氏談「軟弱でした」

師田氏談「左下カンテのハンクは 奥又の北条・新村のハンクと  
同じ感じ。左方カンテは快適この上ない。」

◀ 4ツネ左稜線 ▶ L 師田、片山

取付 3:55

終了 6:30



1P目 雪渓があって皿級のカリーは、雪の下  
で凹角からT師田で登り出す。凹角  
の上のフェイスはまちがえて右の方の  
IV+A0のフェイスをシュリングをつか  
んで登り、大きなテラスへ。35m。

2P目 Top片山で正規のルートのフェイス  
を登る。35m。

大きなテラスからコンテでカンテへ出て登  
るが「おかしい」ということでもじり。(実  
はあっていたらいい) 右へ踏み跡をいかにト  
ラバースし、上へ登り、また下り、右の草付  
の岩稜を登り出し、途中でザイルを巻  
いて登り、そのままT5まで登った。

3P目 T師田でカンテ・オーバーハンクを  
登る。ハンクは、ハンクの下まではスチ  
ンスがないのでシュリングを1つつかんで登り、ハンク自体は上の  
面にある。しっかりしたホールドをつかんでフリーで乗越せる。35m。

4PE T片山ですぐにカンテラインをいかに行く。IV級のリッジも  
くまっていた。35m

5P目 T師田で10m登り。3本ツアットのコレで切る。

ここから片山が5mほど登り、ザイルを巻いて、4ツネの頭へ。

(記片山)

④ 千二ネ 中央4ムニー ~ Oバンド: 6ワラック ▶ 山崎, 二保, 山崎

取付 16:05

終了 18:20

1P目 4ムニーの中をも3に登ったので、ガッパがひがかり、登りにくかった。  
4ムニーの中を10mほど登ると、ホールドがどうしてもなくなり、3~4  
mほどワラックに出て登り、再び4ムニーを登る。

2P目 4ムニーの中を登って行くが、ぬれでいやらしかった。しかしいして  
むずかしくなかった。

中央バンド Oバンドはコンテで行く。

3P目 6ワラックの取付は非常にむずかしく強引によじ登る。あとはすい  
すい行った。  
(記 山崎)

山崎氏談「6ワラックは、かなり高度感を感じ、気持ちよかったです。」

7月23日 ①のち ガス

5:55 三ノ窓 B.C. 撤収。出発、池ノ谷ガリ-を登る。

6:45 池ノ谷乗越 重荷での岩稜歩きは非常にしんどい。

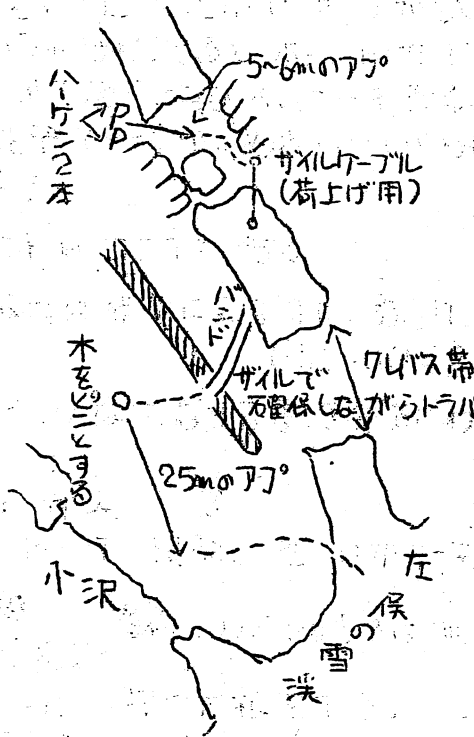
8:20 剣のピーク着。

8:35 // 登。早月尾根を下る。

9:38 左保のゴルらしきところにつく。師田と二保が2600峰らしきピー  
クに左保の偵察に行く。

10:05 ゴルより左保と思われるところを下り始める。かいていておまけに  
少し下ると、酒滝があったので、左保の源頭には酒滝などない  
はずだし思いひきかえした。(実は正しかったのです) そして、そのゴ  
ルより、馬場島側の次のゴルより下り始める。この沢の源頭は  
たいしてかいていず、すぐに雪渓がでたので、アイゼンをつける。  
一年生はアイゼン歩行になれていず、スリップする者もいて、上級生  
をたびたびはらはらさせた。たびたびワラックがありたいへん  
苦労した。一度は、雪面に3~4mほどの段差ができていて、か  
いて下るこしが困難であつたため、雪面にピッケルを2本さし、これを  
こして、ザイルをつかい荷をおろしてから、人間はアブガイレにした。  
最後の師田は、飛びおりてきた。このころより、コマワザルニエや  
二本槍にゼガが左岸から合流しないので、左保でない谷をた  
いでいるのではないかという疑念がわきた。こののちも、急な雪  
渓を下り、雪渓のたいへんくび木たしころなど苦労して下った。また、この

谷は左俣ではないにしても、ほぼ「確実」になってきた。この谷が広い雪渓(左俣)と合流している地点付近には、ワレバスが非常に発達している。アップサイルに2回して、たがまきをいらいれた。



まず右岸の岩にハーケンを2本打ち、5~6mほどのアップサイルをしてワレバスの甲に入る。次の雪渓の上には荷を背負ったままでは困難なので、荷を先にサイルをカーブのようにしてつり上げた。次のワレバス帯は谷通しに、いけないため右岸のバンドをトラバースして、尾根を乗り越え反対側の小沢にアップサイルした。ここからは歩いて、左俣に入った。

16:00 左俣と合流。

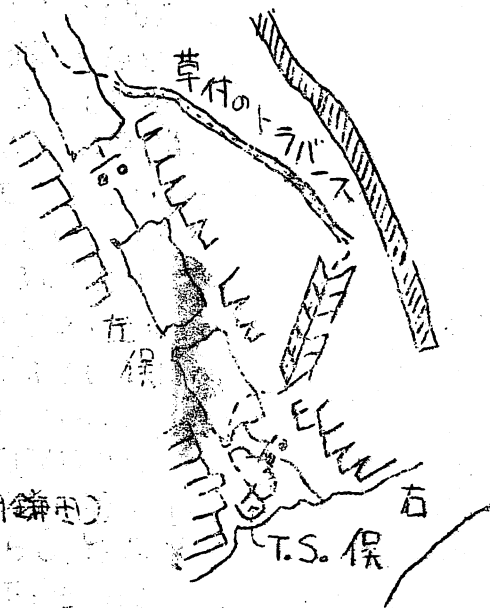
左俣の広い雪渓を下り始めて、15分ほどすると、雪渓が切れて滝が出ていたので、師田と二俣が偵察に行き、結局、中尾根側の草付をトラバースして浅いルートをおりた。

16:50 高まき開始  
17:15 " 終了

高まきを終了して、二俣まで下ると、再び滝が出ていて、右俣へかたんに下ることができなくなった。また、時間がおそい(17:25)で、取手~出合間の道の状態がわからないので、きんは左俣出合の滝の横の露台上にT.S.を決めた。設置の際、師田と二俣は下の滝の偵察に行った。偵察の結果、第三ノリと思われる滝が流れていることがわかったが、なんともいえないだろう、言うことだった。

(記 科 録 冊)

\*この時点、東大谷断念が決定(くわしくは、最後の項)

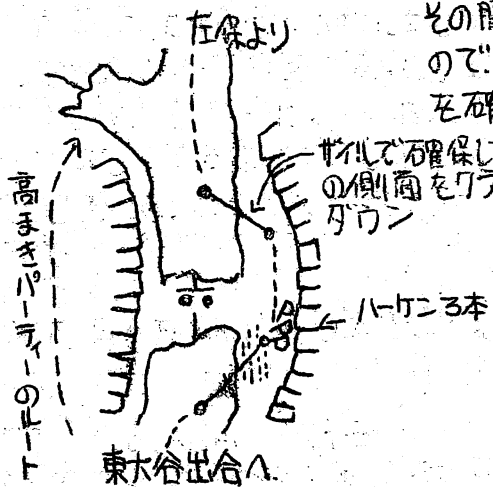


7月24日

6:45 T.S. を撤収し、露岩より右保の雪渓へおりの準備をする。さのうの偵察に行。たとき、T.S. の脇の岩にハーケンを打ておいたので、それをつかて。荷と人間を別々にザイルでおろした。荷は、ザイルを上と下で引ばって張り、カラビナをつかてすべりおろした。人間は、1.5m シュルトの中の岩のテラスまでおり、それから、岩と雪渓に足をつばって雪渓にはい上がる。

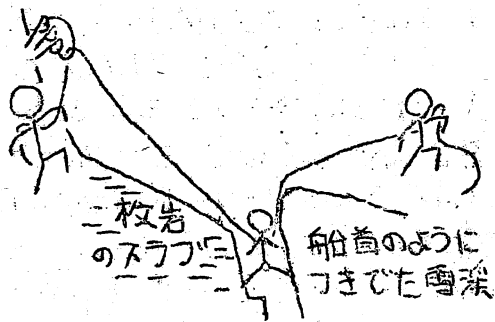
7:15 全員が、右保、左保の合流点におりたち、出合に向う。300m ほどは雪渓が出ていたが、その後、第3の滝らしきものの上に出る。

7:30 第3の滝らしき滝のすぐ前で、たん左岸のシュルトの中へおる。ここは雪渓の側面が 80° ほどあり、危険なので、ザイル確保をしておる。ここより師田が左岸を高まきできるが偵察に行く。



その間、左岸の岩に残置ハーケンを見つけたので、これにハーケンを2本打ちだし、これを確保の支点として師田が先に雪渓の上へうつる。このうち、再びザイルをケーブルのようにはり荷物をすべりおろす。

人間は、左岸の二保と、雪渓上の師田の両方から確保してもらい、一枚岩のストラブの上を、アイゼンをギリギリいわせながら下り、シュルト内で、岩と雪渓に足をふばって雪渓上にとびのった。(左下四) のりうつた雪渓は、滝の方に船首のように、突き出ているので、ただちに中央へ移動する。最後の二保も、ザイルをたよりに無事雪渓上へうつる。



※この時右岸を大きく高まいていた Party がいた。

その後、雪渓をおりていき、雪の消えるころから右岸をいく。雪渓のおわる、ほんの数m 手前で、Top の片山が雪渓を、ふみぬき、おちるが、深くなかったので、軽傷ですんだ。 8:05 出合着。ホッ。

24日の行動は、これで終わりとし、あとは、精神的、肉体的疲労の回復をはかる。  
(山崎 記)

7月25日

4:45 東大谷の出合登。まず立山川の右岸に於て下降するが途中で、踏み跡が消えたため、左岸へ渡り、しばらくして再び右岸へわたる。できるだけ右岸づたいに下降するが右岸がゴルジュになって下降ができなくなったので左岸に徒渉して、しばらくいき、右岸を下降できるようになると再び渡り、右岸を進む。結局 5~6回の渡りをくり返した。この間の渡りで、一年生の羽鎌田が、あやうく、流されそうになり全身びしょぬれになる。

羽鎌田氏談「イヤー、やはり夏は沢登りに限るよ。」

最後の休みから、5、6分した所に小さなルンゼがあり、そこを高まいていとし果して、それが本来の道であった。その道はぬれた岩がゴロゴロしていて、とても歩きにくい。おまけにものすごくいたいトゲをもつ草がところどころはえていて非常に不愉快な道だ。20分ほど歩くと、沼に出る。その下方からは林道となり馬場島へはじきついた。  
(記山崎)

8:10 馬場島着。剣がなんだか、1/3くらい大きく見えた。

### — 東大谷断念の弁 — Leader 師田

ここまでの記録からもわかるように、今回の剣面顔 Party は、東大谷での登攀行動をほぼ全面的に放棄して下山したので、そのことについて、

■ なんで「左の左保」に入ってしまったのか

7/23 剣本峰より早月尾根を下降してきた僕達は、左保のコルにて一本取った。ここで師田、二保で偵察に2600m Peak 手前の Peak に行く。ここより見た感じでは、左保のコルよりのルンゼのほうが悪そうだった。そして師田は、2600 Peak と手前の Peak の間からののが左保と思ひ、二保は左保のコルからののが左保と思つた。ここで2600m Peak まで行ってみれば、岩は簡単に出了たのだが、2人ともズリなく、それはしなかつた。そして、しかも左保のコルのところから下降してみようということに妥協した。そして、上部のがれが予想外に悪く、更に洞窟も出てきたので、これは二本槍ルンゼ or エボシルンゼではないかと思ひ、登り直して、次の本来は左の左保のコル



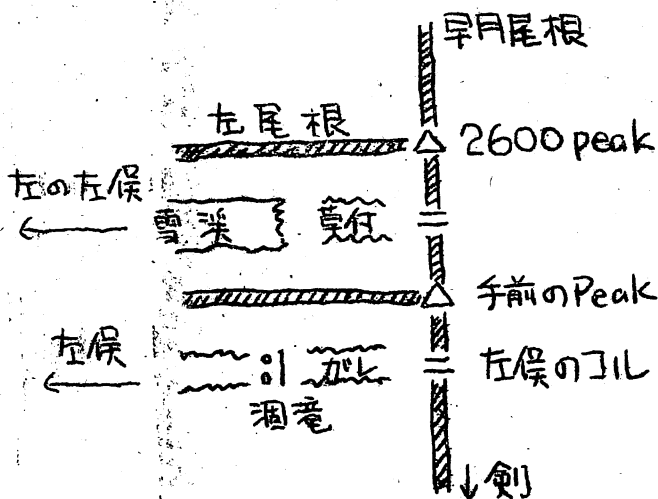
から、左の左俣を左俣に信じつつ下り出したのである。

### 7/23 東大谷断念のいきつ

6:00ごろ東大谷二取のT.S.から師田、二俣で、出合までの偵察に出かけた。この時、第三の滝と思われる滝が完全に出ていることがわかった。そのため ① 第三の滝が出ている。② 東大谷の今年の雪渓の状態が非常に悪い。③ 事故を起こしても僕等の力では何もできない。④ ①②③の理由で断念することを決定。

### 7/24の Meeting

東大谷出合になんとかたじりつき、あがりくつろいだ。昼ごろ、師田より、もう一度、東大谷登攀を考え直してみないか、と持ちかけられ、5人で話し合った。師田が、又、持ち出した理由は、① 今日、たぶり休めば、体力的及び精神的余裕を取り戻せること。② キズでなく、サブツの行動ならもともと楽なこと。③ 第三の滝と思えたのは、じつも第二の滝で右岸から高まけること。この点からたまた、しかし、一年生が「死にたくないから行きたくない。東大谷は怖い。」「又出直したい。」「みんなが行くならテニキパーしていたい」という意見が出され、5人そろっての行動(Partyとしてのまじまり)がしれないと判断したので、その時点で、東大谷断念を最終的に決定した。一言で言えば、Partyの力量の不足ということになるだろう。



〔左俣と左の左俣の降口付近〕

夏山  
“剣岳西面”

昭和51年10月17日発行  
(130部)

信州大学山岳会

伊那松本山岳部